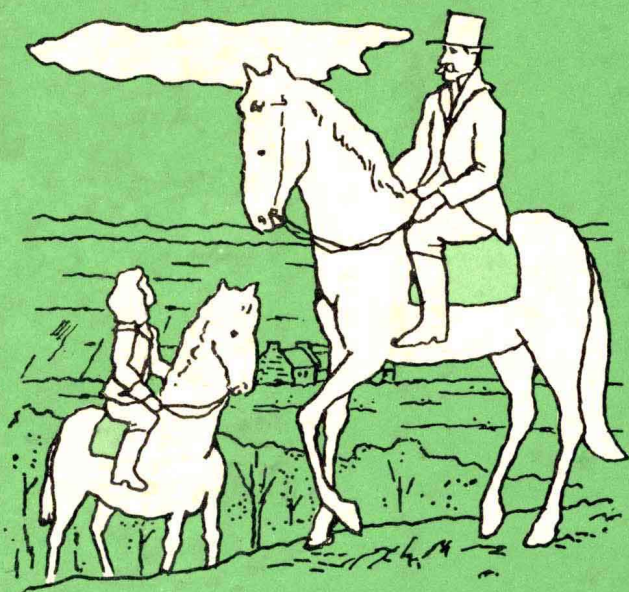


小公子

バーネット作 吉田甲子太郎訳



バーネット作 吉田甲子太郎訳

小 公 子

岩波少年文庫 73 昭29

348 P. さし絵 15 18 cm 小学上級以上

930 Burnett, F.

"Little Lord Fauntleroy"

1886

小 公 子

岩波少年文庫 73

昭和29年3月1日 第1刷発行

¥ 300

昭和43年4月15日 第10刷発行

訳 者 よし だ き お た ろう
吉 田 甲 子 太 郎

東京都千代田区神田一ツ橋2-3

発行者 岩 波 雄 二 郎

東京都板橋区志村町5番地

印刷者 柳 川 太 郎

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩 波 書 店
神田一ツ橋2-3

落丁本・乱丁本はお取替いたします

凸版印刷・複製本

小 公 子

バーネット作
吉田甲子太郎訳

岩波少年文庫 73

目次

1	不意のお使い……………	五
2	セドリツクの友だち……………	三三
3	船出……………	七〇
4	イギリスに着いて……………	八二
5	城で……………	一〇五
6	伯爵と孫……………	一四三
7	教会で……………	一八五
8	ウマのけいこ……………	二〇一
9	くずれ長屋……………	二二九
10	伯爵のおどろき……………	二三三
11	アメリカでの心配……………	二六九
12	競争者……………	二九一
13	ディックの救いの手……………	三〇九

14	見やぶる.....	三〇
15	誕生日.....	三〇
	あとがき.....	三〇

さし絵
古茂田 守介

1 不意のお使い

セドリック自身は、なんにも知りませんでした。そんな話を、きかされたこともなかったからです。おとうさまが、イギリス人だったということだけは、おかあさまからきいて、知っていました。けれども、そのおとうさまがなくなったのは、セドリックが、まだ、ごく小さい時のことでしたから、おとうさまのことは、よくおぼえておりません。ただ、大きな人で、目が青く、長い口ひげをはやしていたことだの、肩車に乗せてもらって、へやのなかを、ぐるぐるまわったのがうれしかったことだのは、おぼえています。おとうさまがなくなってからは、おかあさまには、おとうさまの話をしないほうがいいということが、セドリックにもだんだんわかってきました。おとうさまの病気のあいだ、セドリックはよそへやられていたのです。そして、うちへ帰ってきたのは、もうなにもかも、あとかたづけがすんだあとでした。おかあさまもやっぱり、ひどい病気だったのでしたが、ようやく起きて、窓のそばのいすにかけられるようになっていました。おかあさまはやせて青じろく、きれいな顔からは、えくぼがすっかり消えてしまい、大きな悲しそうな目をして、黒い服に身をつつんでいました。

「おかあさま、おとうさまは、もうよくおなりになったの？」と、セドリックはききました。

すると、おかあさまの腕が、ふるえたような気がしたので、セドリックは巻き毛の頭をかしげて、おかあさまの顔をのぞきこみました。すると、なんだか自分まで、泣きだしたような気持ちになりました。

「おかあさま、おとうさまはおなおりになったの？」

そのときゆうに、セドリックは、やさしい幼ごころから、おかあさまの首をだきしめ、いく度もいく度もキスしてあげ、おかあさまのほおに、自分のやわらかなほおをすりよせずにはいられないような気もちになりました。で、そのとおりにしますと、おかあさまは、セドリックの肩に顔をおしあて、もうけっして、おまえをはなしませんよというように、しっかりと抱きしめて、はげしく泣きました。

「そうよ。もう、おなおりになったのよ。」と、おかあさまは泣きじゃくりながら言いました。「すっかりよくおなりになったのよ、でもね、わたしたちはね——たった、ふたりっきりになってしまったんですよ、ふたりっきりにね。」

そういわれると、セドリックは、子どもごころにも、ああ、あの大きな、りっぱな、若いおとうさまは、もう帰ってはいらっしゃらないのだ、人が死ぬということはいたけれど、おとうさまもやっぱりおなくなりになったのだ、ということがわかりました。けれども、いったい、どういうふしぎなわけで、こんな悲しいことが起こるのか、それは、はっきりのみこめませんで

した。おとうさまのことをいうと、いつもおかあさまが泣きだすので、セドリックは、もうおとうさまの話は、あまりしないほうがいいだろうと、心のなかで決心しました。また、じっとして、ものも言わずに、ストーヴの火に見いたり、窓の外をながめたりしているおかあさまを、ほっておいてはいけないのだ、ということもわかってきました。この母と子は、知りあいもごくすくなく、人から見たら、さぞさびしいだろうと思われるような生活をしていました。もっとも、セドリックは、大きくなってから、なぜうちにはお客さまがこないのか、そのわけをきくまでは、べつにさびしいとは思っていませんでした。大きくなってからはじめて、おかあさまはみなし子で、おとうさまと結婚した時は、たよる人もなく、ひとりぼっちだった、ということを知りました。おかあさまはたいそうきれいで、あるお金もちの老婦人のおあいてをつとめていましたが、この婦人は、おかあさまに、あまりやさしくしてはくれませんでした。ある日のこと、セドリック・エロル大尉が、ちょうど、この家に来あわせていた時、おかあさまがまづげに涙をいっぱいためて、二階へかけあがってゆくところをみました。そして、そのいかにも愛らしい、あどけない、悲しそうな姿を、大尉は、どうしても忘れることができなくなりました。いろいろとふしぎなことが起こったすえに、ふたりはおたがいによく知りあい、ふかく愛しあうようになって結婚しました。けれども、そのために、ふたりは、いく人かの人たちから、よく思われなくなりました。なかでも一ばん、腹をたてたのは、大尉のおとうさんです。この人はイギリスに住ん

でいる、大金もちの、えらい老貴族でしたが、たいへんなかんしゃくもちで、アメリカとアメリカ人をひどくきらっていました。この人にはセドリック大尉の上に、ふたりのむすこがありました。イギリスの法律では、家につたわる爵位も、たくさんの財産も、長男がうけつぎ、もしも長男が死んだ場合には、次男があとつぎになることになっていましたから、セドリック大尉は、そんな大家に生まれながら、自分が、大金もちになる見こみはありませんでした。

ところがたまたまこの人には、兄ふたりにはさずけられなかった、天のたまものがありました。美しい顔、たのしく上品な姿、明かるいほえみ、快活なよい声、それに、おおしく、おうようで、世にも親切な人がらなど、大尉には、だれにもきつと愛される、といったところがありました。それにひきかえ、ふたりの兄は、顔だちもよくなければ、やさしくもかしこくもありません。イートン小学校の生徒だったころにも、人望がなく、大学にいったからも、勉強は大きらい、時間とお金をむだづかいするばかりで、親友などもひとりもありませんでした。このむすこたちのために、父の老伯爵は、しじゅう失望したり、恥かしい思いをさせられたりしていました。あととりのむすこは、貴い家名のほまれになるどころか、男らしい、気高いところなど一つもなく、わがままかってな、金づかいのあらい、くだらない人間になりはてるよりほかのような人物でした。それですのに、三男に生まれて、財産もろくにもらわれないむすこが、才能も、やさしさも、強さも、美しさも、すっかり、ひとりじめしてしまうとは、たいへん残念なことだと、老伯爵は

考えたのです。時によると、この美しい若ものが、りっぱな爵位と、すばらしい財産をつぐにふさわしい、いろいろなすぐれたところを、ひとりじめしているように見えるのを、憎らしく思ったくらいでした。そうはいっても伯爵は、ごうまんで、がんこな老人らしい、その心の底で、この一ばん年したの子をかわいく思わずにはいられなかったのです。だから、このむすこをアメリカへ旅立たせたのは、まったく、一時の腹だちまぎれからのことだったのです。

伯爵は、そのころ、ふたりの兄の乱暴な行いにひどくこまっていたので、末むすこを、このふたりとしじゅう見くらべて、残念な思いをするのがつらさに、いっそ、しばらく遠くへやってみようと思いついたのでした。

しかし、半年もすると、もう老伯爵はさびしくなりはじめて、心の中で、しきりにまた末っ子の顔をみたいと思うようになりました。そこで、セドリック大尉に手紙を書いて、帰ってくるように言ってやりました。この手紙とゆきちがいにとどいた、セドリック大尉の手紙には、美しいアメリカ娘を愛するようになり、その人と結婚するつもりだと、書いてありました。これを読んだ時の伯爵の腹だちといったら、すさまじいものでした。手紙が来た時に、ちょうど、へやにいわせれた召使いが、殿さまは卒中の発作でも起こされたのかと思ったほど、いかり狂いました。一時間ほども、トラのようにあばれると、こんどは、どっかとすわりこんで、大尉にあてて手紙を書きました。そして、もう二度とふたたびうちへ帰ってくるな、父や兄にも手紙をよこすな、

かつてに暮らして、かつてに死ぬがよい、ドリンコート家からは、永久にかんどうする、父の目の黒いうちは、いくらこまっても助けてもらえないものと思え、といってやりました。

大尉はこの手紙をみて、たいそう悲しみました。イギリスも大すぎだし、自分の生まれた、美しい家もしきりになつかしく思われます。それに、かんしやくもちの、年とったおとうさんさえ、したわしく思っ、おとうさんがいろいろと失望されたことに同情していたのに、いよいよ、もうこれからは、そのせわになる望みもなくなったのだと、さとりました。はじめは、どうしたらよいのか、まるで見当がつきませんでした。自分で働くようには育てられていなかったし、これまで仕事についた経験ありませんでした。しかし、大尉は、勇気とじゅうぶんな決断力とを持っておりました。そこで、イギリス陸軍将校の株を売り、どうやらこうやら、ニューヨークでつとめ口を見つけて、結婚しました。イギリスでのむかしの生活にくらべれば、ずいぶん、ひどいかわりようですが、大尉はまだ年も若いし、愉快に暮らしている時でしたから、今のうち、せつせと働けば、いつかは、きっとよくなるだろうと楽しみにしていました。ひっそりした町に、じんまりした家を借りたのでしたが、その家で男の子がひとり生まれました。質素ではありましたが、なにもかもおもしろく、愉快でした。だから大尉は、その人が、たいそうかわいい人で、たがいに愛しあったというだけのことで、お金もちの老婦人の、美しいおあいて役の人と結婚してしまったことを、すこしでも後悔するようなことはありませんでした。まったく、その人はな

んともいえない、あいらしい婦人^{ふじん}でした。そして、生まれた坊^{ぼう}やも両親^{りやうしん}そっくりでした。こんな質素^{しつそ}な、やすっぽい家に生まれはしましたが、これ以上^{いじょう}運^{うん}のいい赤ちゃんはないように思われました。第一^{だいいち}に、この赤ちゃんは、いつも、じょうぶでしたから、だれにもめんどろをかけたことがありません。第二に、性質^{せいしつ}はごくおとなしく、なんともいえないいきょうがありましたから、みんなをよろこばせました。第三に、見た目に美^{うつく}しかったから、まるで絵^えにかいたようでした。髪^{かみ}の毛^けのうすい赤ちゃんとはちがつて、生まれた時から、ふさふさした、やわらかな細^{きんぱつ}い金髪^{きんぱつ}で、六カ月になると、毛^けさがぐるぐると巻^まきぢれて、ゆるく、まるまってきた。大きな茶^{ちや}いろの目をしていて、まつげが長く、なんとも、かわいい顔です。脊骨^{せほね}がしっかりとしていて、足もすばらしくたくましく、九カ月めには、きゆうに歩^{ある}きだすようになりました。赤ちゃんにしてはいかにもお行儀^{ぎようぎ}がよいので、この坊^{ぼう}やとお友だちになることはとても愉快^{ゆかい}でした。どの人とも仲^{なか}よしだと思^{おも}っているらしく、うばぐるまにのって、町を歩^{ある}いている時など、人があやしたりすると、茶^{ちや}いろの目で、その見も知らぬ人を、ちらっと、かわいらしく、まじめくさって見たと思^{おも}うと、すぐそのあとから、にこにこ、人なつっこく笑^{わら}いかけるのでした。ですから、この、じみな町の近所^{きんじよ}では、だれでもが、坊^{ぼう}やの顔をみて、あやしめるのを樂^{たの}しみにするようになりました。——この上もない氣^きむずかしやだと思^{おも}われている、町角^{まちかど}の食料品屋^{しよくりようひんや}のおじさんまでがそうでした。月日^{つきひ}がたつにつれて、セドリツクは、いよいよきれいな、目につく子になりました。

すこし大きくなって、みじかい、白いスカートをはき、波うつ金髪に、白い大きな帽子をあみだにかぶって、おもちゃの車をひっぱりながら、うばといっしょに歩いているところは、まことにりっぱで、すっかりしていて、美しくて、行き来の人の子につきました。いつもうばはうちへ帰ると、婦人がたがわざわ馬車をとめて、坊ちやまをごらんになって、ことばをかけましたよとか、坊ちやまが、まえからの知りあひかなんぞのように、にこにこして、話しかけるので、みなさまが、たいそううれしがっておいででしたなどと、おかあさまに知らせるのです。この、いっふう変っている、おもしろくて、快活な、ものおじをしないで、だれとでも仲よしになってしまう態度が、セドリックの一ばん人をひきつけるところです。これは、セドリックが、生まれるとき人なつこく、おもいやりふかく、自分がのぞむように、人にも気もちよくしてあげたいと思う、やさしい心から起こることだと思われます。ですから、まわりの人たちの気もちも、すぐにのみこんでしまうのです。それにまた、愛情のふかい、思いやりのある、やさしく上品な両親といつもいっしょに暮らしていたために、そういう気もちが、セドリックの心に、だんだん強まってきたでしょう。セドリックは、うちのなかで、不親切なことばだの、無作法なことばを、一度もきいたことがありませんでした。いつもかわいがられ、だいにされ、やさしくあつかわれていましたから、セドリックの幼い心にも、親切と、無邪気なあたたかい感情とがあふれていたのです。おかあさまが、美しい、親しみのある名で呼ばれるのを、いつも耳にしていたの



で、自分もおかあさまにお話する時には、そのまねをしました。おとうさまが、おかあさまによく気をつけて、だいじに、いたわっているのを見なれていましたから、自分もまた、おかあさまをだいじにするようになったのです。

それですから、セドリックは、おとうさまはもうお帰りにはならないのだとさととり、おかあさまの深いなげきを見るにつけても、そのやさしい幼おきなごころに、おかあさまを喜よろこばすために、できるだけのことをしなければならぬのだと、だんだんに、そう思うようになりました。まだ、赤ちゃんよりすこしましなぐらいの年でしたのに、おかあさまのひざにあがってキスして、巻まき毛の頭を、おかあさまの首くびにもたせかける時でも、また、おもちゃや絵本えほんを持っていつて見せてあげたり、また、おかあさまが長いすによこになっているそばで、自分もちこまやすって休む時でも、その思いは心からはなれませんでした。セドリックは、まだ年がゆかず、ほかにどうしたらいいかわかりませんでしたから、自分でできるだけのことをしたのです。けれども、それがかえって、セドリックにはとてもわからないほど、おかあさまには慰なぐさめになったのでした。

「ねえ、メアリーや、」ある時、おかあさまが、むかしからいる召使めしつかいに言っているのを、セドリックはききました。「きつと坊ぼくやは、子どもごころに、わたしを力づけてくれるつもりなのね、——きつと、そうなんだわ。ときどき、かわいらしい、ふしぎそうな顔をして、気のどくそうにわたしをながめてはね、そばへやって来て、やさしくわたしをなでたり、なんか見せてくれたり

するんだもの。あれで、なかなかおとななんだからね。なにもかも、承知してるんだらうと思うのよ。」

大きくなるにつれて、セドリックの持っている、いろいろの、いっふう変つておもしろい、かわいさが、たいそう人をよろこばせたり、おもしろがらせたりしました。おかあさまにとつては、この上もない、よいおあいてなので、おかあさまは、ほかのあいてがほしいとは思いませんでした。散歩するにも、話すにも、遊ぶにも、ふたりはいつもいっしょでした。セドリックは、ごく幼いうちに、読むことをおぼえました。それから、夜になると、炉のまえの敷き物の上によこになって、大きな声で読みました。——ときには、お話、ときには、おとなの読むような大きな書物、また、ときによりますと、新聞さえ読むことがあります。そんな時には、きばつなことを言うので、エロル夫人がうれしそうに笑う声を、台どころにいるメアリーがよく耳にしたものでした。

「ほんとにさ、」と、食料品屋のおじさんをつかまえて、メアリーは言うのです。「だれだって笑わずにはいられませんよ、坊ちゃんまのいっふう変つた、かわいいごようすだの——おかしなものの言い方にはね。こんどの大統領の指名のあった晩にはさ、台どころへおいでになって、暖炉のまえにお立ちになるじゃないの。そのかっこうといったら、まるで絵みたいだったよ。ちっちゃなポッケに両手をつっこんで、あの無邪気なお顔を判事さまみたいに、しかつめらしくなす